

229 普段寺古墳群

—西伯耆最古段階の前方後方墳—

所在地

鳥取県西伯郡南部町天万字下普段寺山

立地

峰山(192.7m)から北西方向に派生する、標高50m程度の小丘陵の先端部に位置する。丘陵先端近くの1号墳から5号墳までは連続的に存在し(図1)、6号墳、7号墳は、それぞれやや離れて存在する。

時期

古墳時代前期

発見と調査

古墳群発見の契機は、1921年(大正10)に農業用溜池の造成工事によって2号墳が破壊され、三角縁神獸鏡が出土したことに始まる。当時2号墳は直径約16m、高さ3.6mの円墳として認識されたが、全長約22.5m、後円部径11.7m、高さ2.4mの前方後円墳(1号墳)が隣接していると報告された(文献1)。

1952年(昭和27)に地元の中学生によって1号墳の埋葬施設が発掘され、もう1面の三角縁神獸鏡、管玉、鉄剣片等が掘り出された。このことは佐々木謙を通じて京都大学の樋口隆康に伝えられ、三角縁神獸鏡に鋳型の改変や補刻を行なう同型と呼ぶべき製作技法があるとの認識を導くなど、学史的に重要な発見となった(文献11)。

その後、佐々木古代文化研究室が古墳の性格解明と残存遺物の回収を目的として1956年(昭和31)に墳頂部を発掘した。三角縁神獸鏡が出土した埋葬施設とは別に、大型壺を用いた土器棺墓の存在が明らかになり、1号墳の編年の位置を探る判断材料としても重視されてきた(文献11、14)。

山陰における代表的な前期古墳として、しばしば話題にされ、1970年代、80年代、90年代に墳丘測量が行なわれ、1号墳は前方後円墳ではなく、前方後方墳であるとの認識に改まったが、墳丘規模や内部構造等については詳細が不明なままであった。

2006年(平成18)から2011年(平成23)にかけて、鳥取大学と島根大学が合同で普段寺古墳群調査団を組織

し、継続的に墳丘規模・形態等の解明を目指した測量調査や発掘調査を実施するとともに、既存の出土資料の再整理を行なった(文献4、文献6～9)。

遺跡の種類

1号墳は前方後方墳である。2号墳は方墳として紹介されることが多いが、円墳の可能性もある。3号墳から7号墳は、出土遺物の存在なども知られていないため、詳細は不明である。6号墳は径16mの円墳と考えられ、墳頂中央に大きな盗掘坑がある。

1号墳は「普段寺古墳」として南部町指定史跡に(1971(昭和46)年11月3日)、1号墳出土の三角縁神獸鏡は重要文化財に指定されている(1987年(昭和62)6月6日)。

遺構と遺物

1号墳は、前方部前端が墓地によって削平を被っているため正確な全長を把握できないが、約25mと推測される。後方部は東西約13m、南北約14m、墳丘高は少なくとも2.7mあったと考えられる。地山を前方後方形に削り出したのち、主として後方部に盛土を施して構築していることが発掘調査の結果判明した。後方部は少なくとも4回の乱掘を被っており、本来の埋葬施設はすでに失われているが、後方部のほぼ中央に、古墳の主軸と概ね直交する方向に棺があったと推定される。棺の形状も材質も不明であるが、棺を想定し得る空間は幅0.6m、長さは最大に見積もっても3.7m程度で、小規模な木棺であった可能性がある。

後方部の盛土は、大きく2段階に分かれており、墳丘構築と棺の設置、埋設が同時進行する築造方法(無墓壇)を想定されている。

中心埋葬の木棺以外に、後方部墳頂面に副次埋葬として大型広口壺を用いた土器棺墓がある。また、周辺埋葬として、西側くびれ部裾にも広口壺と甕を組み合わせた土器棺墓が1基ある。これら以外にも、西側の削平された崖面に土器棺があったとされたり、土器棺に使用されるタイプの大型広口壺が複数知られているが、現物が行方不明であったり、1号墳に確実に伴うのかどうか明らかでない。本格的な検討は別の機会に委ね、本項では、確実な資料のみ取り上げる。

1号墳の中心埋葬施設の副葬品として、三角縁神獸鏡1面、鉄剣片一括、鉈1点、管玉1点がある。

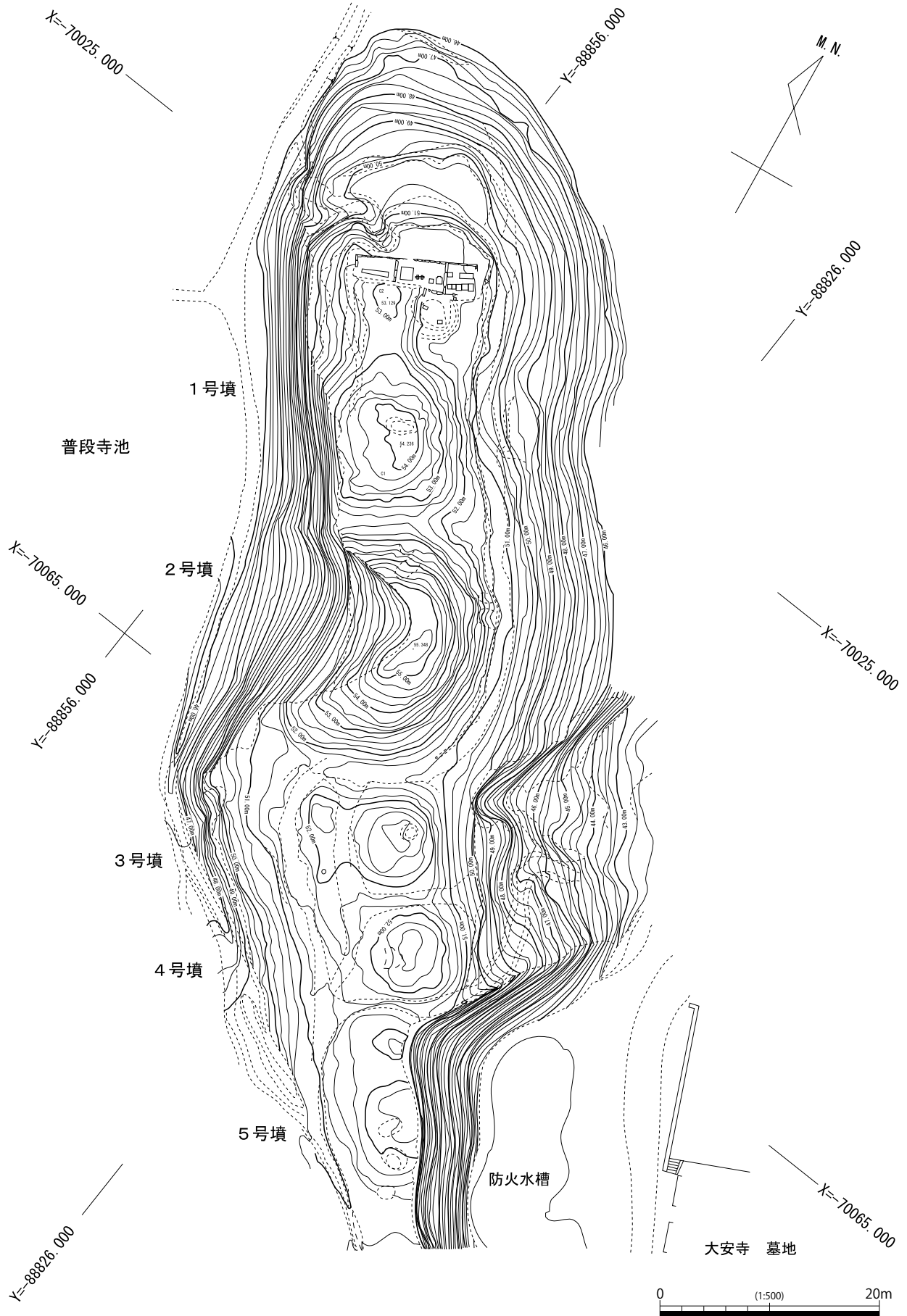


图1 普段寺古墳群測量図

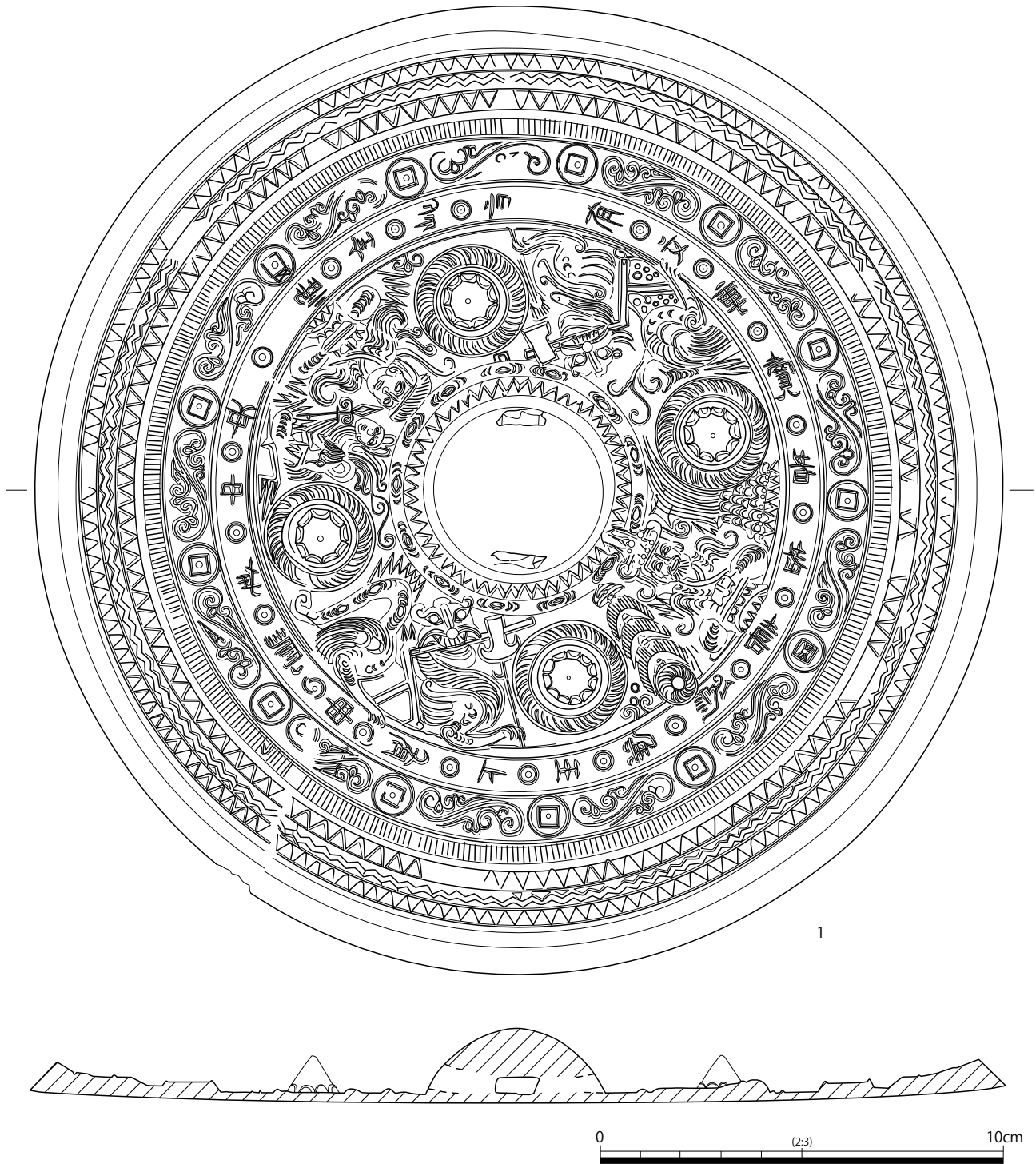


図2 普段寺1号墳の三角縁神獣鏡

三角縁神獣鏡は、面径24.1cmを測る唐草文帯二神二獣鏡である（図2-1）。「惟念此竟有文章賣者老壽為候王上有申鳥在中央」の銘文を時計回りに配する。内区中央を4乳で分割し、対向する位置に西王母、東王父、斧鉞を嚙む2獣を配置している（京大目録番号97、同范鏡番号55、配置J1）。図像の表現は二神二獣鏡群に多い表現④とされるものである（文献5）。他の文様要素な

どから舶載三角縁神獣鏡の編年の中では、中段階に位置付けられる。福永伸哉の編年ではA-D段階まであるうちのC段階（文献13）、岩本崇の編年では、4段階あるうちの3段階（文献1）に位置付けられている。なお、「同范鏡」として、伝石切神社鏡、推定茨木將軍山古墳鏡、大成古墳鏡が知られている。

鉄製品の多くは細片となっていて器種を特定しがたい

ものが多いが、寸法や断面形等から剣またはヤリの一部と考える破片が存在し、少なくとも3個体分の剣またはヤリが存在したと考えられる（図3-2～5）。

工具としては、小型のヤリガンナが1点ある（図3-6）。これには刃部先端近くに緑青が付着しており、布が付着することも考え合わせると、鏡に近い位置に副葬されたと考えられる。

金属製品以外では、長さ11mm、径4.4mmを測る管玉が1点ある（図3-7）。石材は淡緑色を呈する硬質の素材で、縞状に白色の石理が入る。両面穿孔で、内部にはおそらく石針と考えられる穿孔具の回転痕がよく残る。緑色凝灰岩と推測される未定C群石材を用いた、朝鮮半島系の管玉である可能性が高い（文献3）。

過去に墳丘から出土した土器の中には、1956年（昭和31）に調査された土器棺を構成する大型広口壺、合子形土器がそれぞれ1点ある。また、西側くびれ部裾の土器棺にも広口壺と甕がそれぞれ1点ある。さらに、墳頂に供献されたとされる土器群があり、これらが初葬に伴う土器と考えられる。墳丘出土の土器、くびれ部の土器棺、墳頂部の土器棺の順に記述する。墳丘出土の土器には、通常の土器とともに、一定量の特殊な土器がある。

墳丘出土の土器で通常のものは、甕、広口壺、高坏、鼓形器台がある。甕は複合口縁の小型甕で（図4-1）、復元口径14.0cmを測る。1次口縁と2次口縁の接合部は、後述するくびれ部土器棺臺の甕ほど突出度は高くないものの、シャープなつくりである。口縁端部は比較的シンプルな形態を呈する。平坦面幅は4～5mmある。これ以外にもわずかながら甕の口縁部片が存在する。残存状況は良くないものの、ほぼ同様の特徴をもつと考えられる。胴部片と考えられる破片もあり、数個体程度は存在した可能性がある。

広口壺は、少なくとも5個体以上あると考えられる。いずれも複合口縁の2次口縁部がゆるく広がるタイプで、古墳以外に集落遺跡でも出土する最も一般的なものである。基本的な形状が共通するものに頸部突帯をもつものがあり、ないものと区別しうるが、1号墳出土例は頸部突帯がないものだけで構成される。胴部が下膨れ気

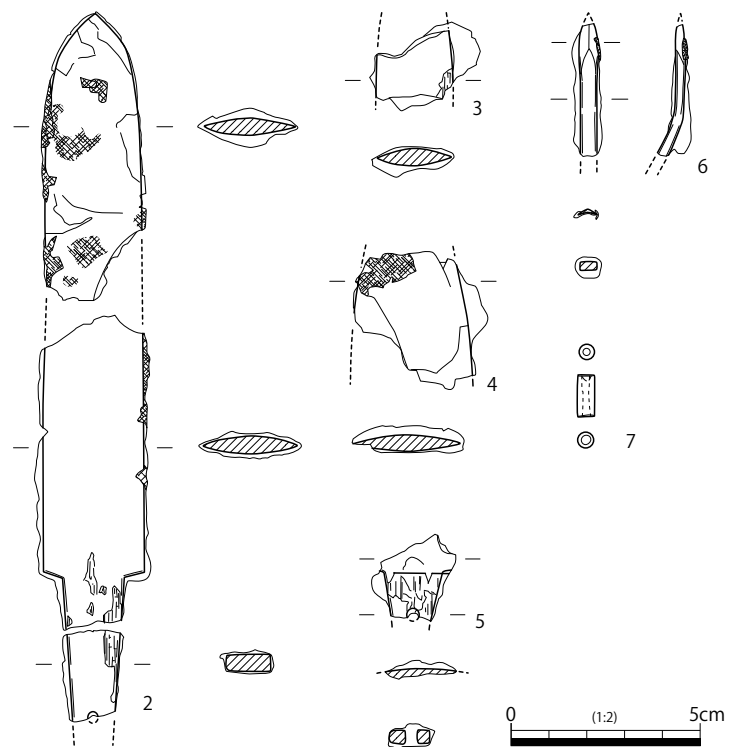


図3 普段寺1号墳出土の鉄器・玉

味の球形胴に復元されるものもあるが、口縁部のつくりは端面が明瞭であり、1次口縁と2次口縁の接合部が水平に突出してシャープな形状を示す。

壺、甕以外の器種としては、小型の鼓形器台と考えられる破片（図4-9）がある。口縁部片と思われるが、口縁端部と筒状部は欠損している。筒状部の径は6cmほどに復元でき、口縁部の径は現状で14cmほどである。このような小型品は、在地の系譜から出現するものではなく、小型丸底土器等を載せるために畿内地方で創出されたものが山陰にフィードバックされたと考えられている（文献10）。細片化した土器の中には、小型丸底土器と考える土器の胴部片や、口径8cm前後に復元できる小型複合口縁土器の口縁部片等があり、そのような小型器種に対応した鼓形器台があると理解できる。ただし、鼓形器台と考える破片は非常に少なく、もともと少なかった可能性がある。

また、高坏の脚部片が数点あり、脚部を坏底部に挿入するタイプの高坏と、筒状脚部の上部に円盤を充填して坏部を成形するタイプの高坏の2種が存在している（図4-19～22）。前者に対応すると考えられる脚部片があり、低平に広がる脚部に小型の椀形坏部がつく形態が復元できる。後者は在地の製作技術系譜を引くものであるが、脚部は径の小さなものが多く、大型品と考えられるもの

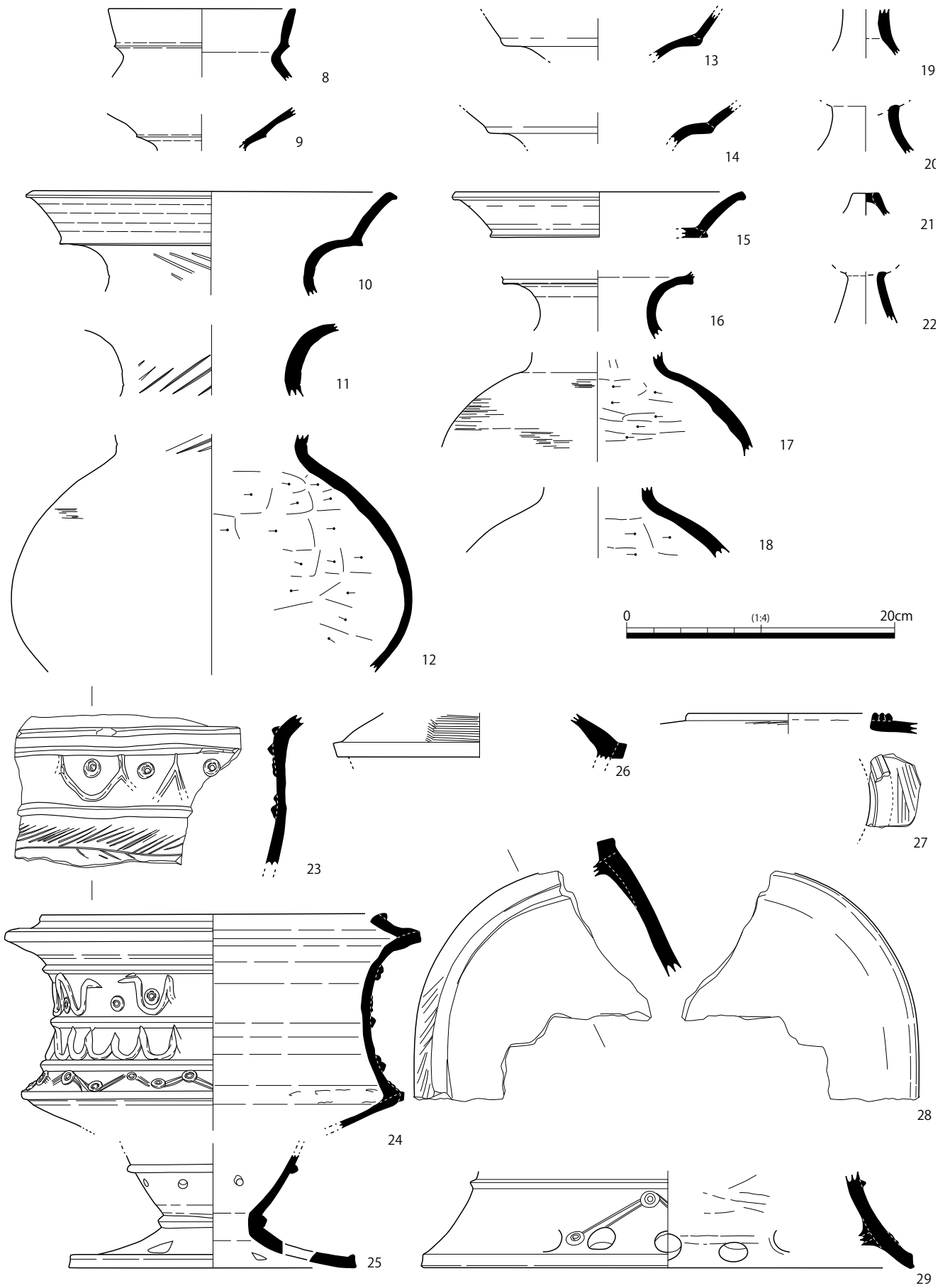


図4 1号墳填丘出土の土器

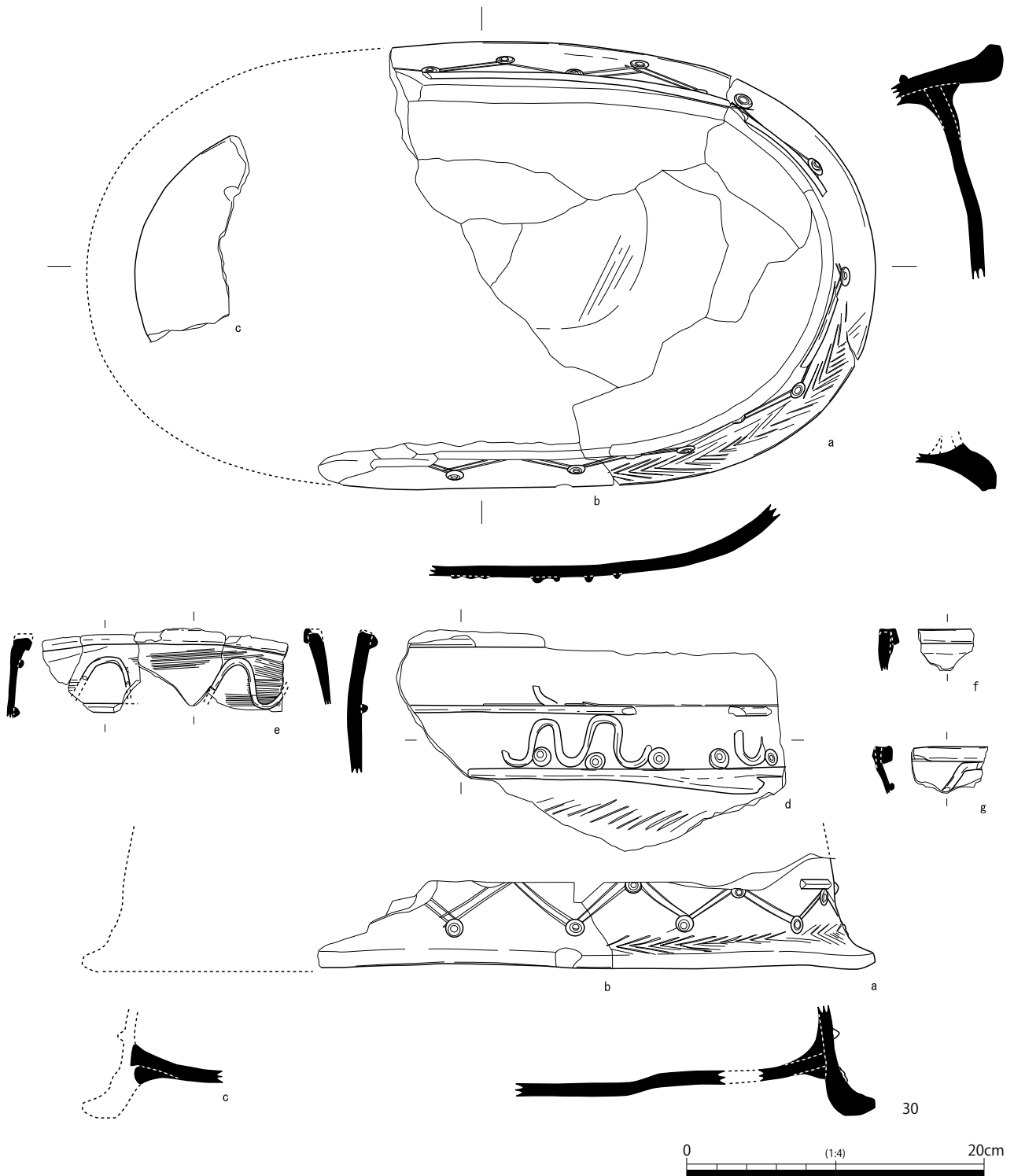


図5 合子形土器

はないのが特徴である。このような様相が編年的位置付けをする際の手がかりとなろう。

一方、墳丘から出土した土師器の中には、類例がほとんどない特殊な土器もある(図4-23～28)。これらの土器は、本来は供献土器の一部であったと考えられる。

23は、横17cm、縦18cmほどの破片であるが、口縁

部や底部と考えられる部分はなく、上下がよくわからない。径5mmほどの粘土紐を横方向に3条貼り付け、その間に羽状文や円形浮文とU字状に粘土紐を連ねた波状文を施す。他のU字状文を持つ土器で、口縁部がわかるものと比較すると、上部が内湾し、裾広がりになる形態の土器と考えられる。

24は、口径25.6cmで、高さ15.9cmを測る。底部は外側に開いて立ち上がる形態をなし、内側に屈曲して胴部に至る。胴部上半は外反し、口縁部で内側に屈曲する。23と同様に胴部を横方向に3区分し、円形浮文とU字状に粘土紐を連ねた波状文などを施す。

25は、器台状の土器で、脚部には水滴形の透かしを入れる。また、受け部状の上半部にも穿孔を施している。24と近接して出土しており、土器の作りも胎土もよく似るため、上下につながって同一個体となる可能性がある。

この他にも楕円形を呈する土器や、透かしや円形浮文などで加飾する土器が多くあり、それらの中には上げ底を部内面に貼り付けた合子と考えられるものが多数存在する。

1956年（昭和31）出土の大型広口壺の底部には穿孔があったとされ、その孔を塞いでいた土器として楕円形の合子形土器がある（図5-30）。これまでは身の底部～脚部の破片（a）のみが知られていたが、これに接合すると考えられる胴部～口縁部片（d）が存在することが判明した。また、破片（a）は、墳丘から出土した底部片（b）が接合するとともに、同一個体と考える文様や胎土をもった口縁部片（e～g）も出土しているため、ある程度器形の復元が可能になった。また、測量調査時に東側くびれ部付近で表採していた器種不明の土器片（c）がこの合子形土器の底部片であったことも判明した。

底部は、長径53cm、短径30cmに復元でき、高さ8cmが残存する。脚部がやや側方に張り出す形態をなし、その内面に上げ底状の平たい底がとりつく。破片a～cの粘土接合痕を観察すると、筒状の本体の内面をやや肥厚させ、そこに底板となる粘土板を載せたのち、表裏面から補充粘土を付加して本体に接着するようである。

外面には2条の並行沈線で鋸歯状の文様が描かれ、その頂点部分に竹管文を押捺した円形浮文が貼り付けられている。鋸歯文の幅や円形浮文の間隔は一定ではなく、精密な割付に従ったものではないようである。上段の円形浮文に接して、幅6mmほどの粘土紐が水平方向に貼り付けられており、後述する身部片と同様に文様の区画をなすと考えられる。側方に張り出す脚部の上面には、貝殻腹縁を押し当てることによってできる羽状文が施されているが、全周せず、全体の1/6ほどの範囲に限ら

れているようだ。施文間隔も密な部分と粗な部分があり、一定ではない。また、調整技法として、底部内面はやや粗いハケメが観察できるが、外面はかなり細かいハケメが施されている。

身の胴部～口縁部片（d）は、現状では接合しないが、破片の湾曲から判断すると、図示したような位置に配置できると考える。口縁端部は断面方形の粘土紐を突帯状に張り付けて成形しており、現状では粘土接合部で剥離しているが、口縁端面に幅1cmほどの水平面をもつと考えられる。胴部には幅6mm前後の粘土紐が水平方向に貼り付けられて区画をなし、その上段、中段区画の中に1条の粘土紐を波状文風に貼り付けている。中段の区画には波状文風の粘土紐に加えて竹管文を押捺した円形浮文を配置している。また、下段には二枚貝の貝殻腹縁によると思われる羽状文が密に施されている。粘土紐の貼り付けにあたっては、器壁とのすき間を細いヘラ状工具で押し引きして密着性を高めているようであり、剥離した場合でも凹線状の工具痕が観察できる。また、平滑な面には残存していないが、粘土紐のすき間等には赤色顔料が付着しており、本来は赤色塗彩されていた可能性が高い。破片の高さは15cmほどであり、底部と合わせると土器の総高は23cm以上になると考えられる。器壁の厚さにあまり相違がないところからみると、接合しないまでも近い位置に配置できる破片と考えられる。復元高は25cm程度と考えられようか。

なお、このような脚部を有し、底板を落とし込む形状の合子形土器のモデルとしては、木製の刳物容器が考えられよう。特異な文様構成もそうした木製容器の装飾や文様等に系譜を求めうる可能性がある。

西側くびれ部で、新たに土器棺墓が確認された。複合口縁の平底甕と複合口縁の広口壺を組み合わせたものである（図6-31・32）。甕は、口径26.8cm、高さ24.8cm、胴部最大径29.2cmである。広口壺は、口径25.8cm、高さ55.8cm、胴部最大径48.2cmである。二次口縁はほぼ垂直に立ち上がるタイプである。口縁部から肩部外面には5段の羽状文を施す。口縁帯と頸部に各1段、肩部に3段あり、段ごとに施文方向を変えている。3段目と4段目は接するように施文し、逆「く」の字状を呈する。また、胴部は最大径が中位より上にあり、徐々にすぼまりつつ丸底の底部へと至る。底部の厚さは5～

9mmあり、内面に指頭圧痕が残る。

1956年（昭和31）出土の大型広口壺は、口径62.4cm、高さ104cm、胴部最大径98.8cmを測る（図7-33）。図5に掲載した楕円形合子形土器と組み合わせて土器棺として後方部墳頂から出土したものである。これまでに墳頂以外で同種の破片が出土していたため、複数個体の存在も想定されたが、整理作業の進捗により、1個体でよいとの結論を得た。

土器としての特徴は、複合口縁の2次口縁が内傾し、端部を水平方向に拡張して幅2cmの平坦面を作る。1次口縁と2次口縁の接合部は突帯が貼り付けられ、外面に斜線文を施す。口縁部と頸部から肩部にかけて8段の羽状文を施す。胴部中位に最大径となる部分があり、底部に向かってすぼまり、丸底となるようである。大型土器の丸底化は時期が降ると考えられ、墳丘出土の土器、西側くびれ部土器棺とも時期差があると言える。

出土した土器の編年的位置付けは、今後の正式報告に委ねるが、初葬に伴う墳丘出土の供献土器の時期、くびれ部の土器棺の時期、墳頂部の大型土器棺の時期の3つの時期を区分していくこととなる。初葬は、遅くとも前期中葉に位置付けうると考えられ、西伯耆における前方部をもった墳丘の出現を考える重要な手がかりを提供する古墳となる。

なお、2号墳は、1号墳との前後関係が明確にわかっていないものの、近接した時期が考えられる。方墳と考えられてきたが、円墳である可能性も考えられ、時期が

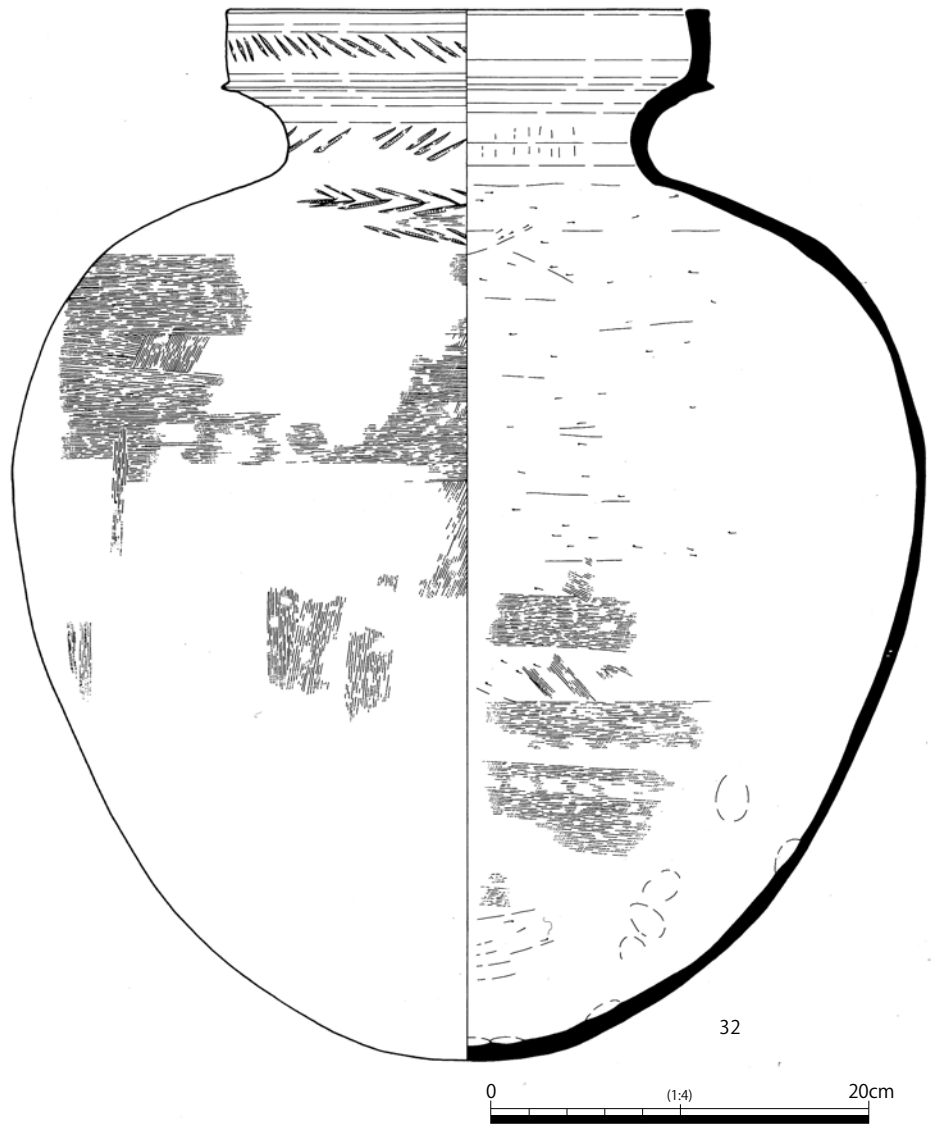
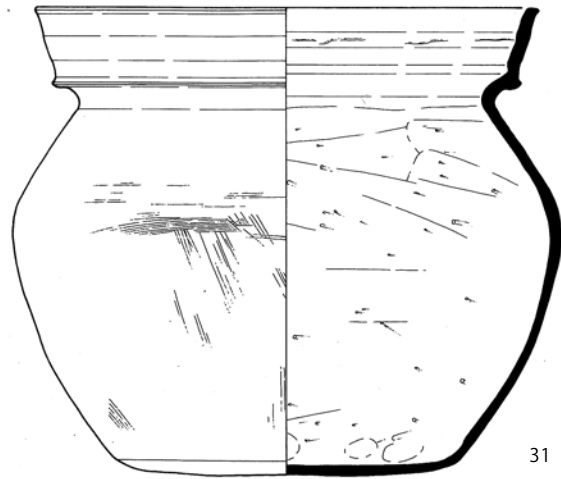


図6 西側くびれ部の土器棺

降る可能性もある。

出土資料は、土器もあったようだが、現在は三角縁神獸鏡しか存在しない。現状では8片に分かれ、鈕など失

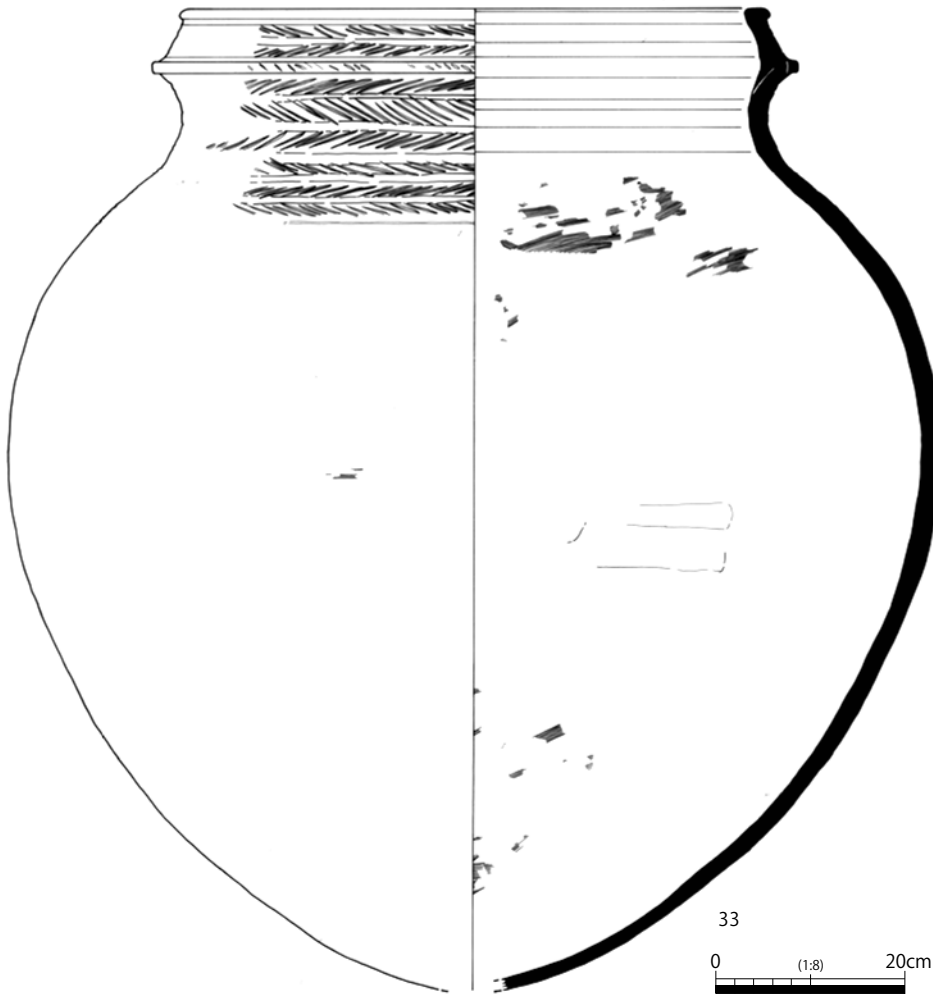


図7 後円部墳頂の大型土器棺

われた破片もある。面径 24.1cm を測る珠文帯四神四獣鏡である（図 8-34）。内区を 4 乳で分割し、対抗する位置に神像と獣像を配置している（京大目録番号 49、同范鏡番号 76、配置 A）。図像の表現は⑤とされるものである（文献 5）。舶載三角縁神獣鏡の編年では、中段階に位置付けられ、福永伸哉は A～D のうちの B 段階（文献 13）、岩本崇は 4 段階中の 3 段階に位置付けている（文献 1）。

特徴と意義

普段寺古墳群は、墳丘規模は小規模であるが、1 号墳、2 号墳と連続的に三角縁神獣鏡が副葬されており、西伯耆地域における古墳時代前期の最も有力な古墳系列と考えられる。同様な古墳は因幡では未発見で、東伯耆地域では旧社村地域の三角縁神獣鏡が知られているが、古墳の実態がよくわからない。普段寺古墳群は、副葬品や出土土器が概ね明らかになる点で、極めて重要な基準資料である。

現状と遺物

1 号墳は南部町指定史跡として保存されている。他の古墳も、現状で保存されている。出土遺物は、三角縁神獣鏡は所蔵者から鳥取県立博物館に寄託されており、表採された土器片などとともに鳥取県立博物館で保管・展示されている。鉄剣などの副葬品や出土土器の一部は、佐々木謙氏旧蔵品が米子市に寄贈されて埋蔵文化財センターで保管されている。2006 年～2011 年（平成 18～23）の発掘調査による出土品は、鳥取大学、島根大学において整理作業を進めている。

文献

1. 岩本崇 2008 「三角縁神獣鏡の生産とその展開」『考古学雑誌』第 92 巻第 3 号、pp. 1-51
2. 梅原末治 1924 『因伯二國に於ける古墳の調査』鳥取県史蹟勝地調査報告第二冊 鳥取県
3. 大賀克彦 2010 「東大寺山古墳出土玉類の考古学的評価」『東大寺山古墳の研究』東大寺山古墳研究会・天理大学・天理参考館、pp. 315- 337
4. 大橋泰夫・高田健一（編）2008 『普段寺古墳群Ⅰ—第 1～3 次調査概要報告書—』普段寺古墳群調査団
5. 岸本直文 1989 「三角縁神獣鏡製作の工人群」『史林』第 72 巻第 5 号、pp. 1-43
6. 高田健一・岩本崇（編）2010 『普段寺古墳群Ⅱ—第 4～7 次調査概要報告書—』普段寺古墳群調査団
7. 高田健一・岩本崇（編）2011 『普段寺古墳群Ⅲ—第 8 次調査概要報告書—』普段寺古墳群調査団
8. 高田健一・岩本崇（編）2012 『普段寺古墳群Ⅳ—第 9 次調査概要報告書—』普段寺古墳群調査団
9. 高田健一 2013 『山陰における前方後円墳の出現過程』鳥取大学地域学部

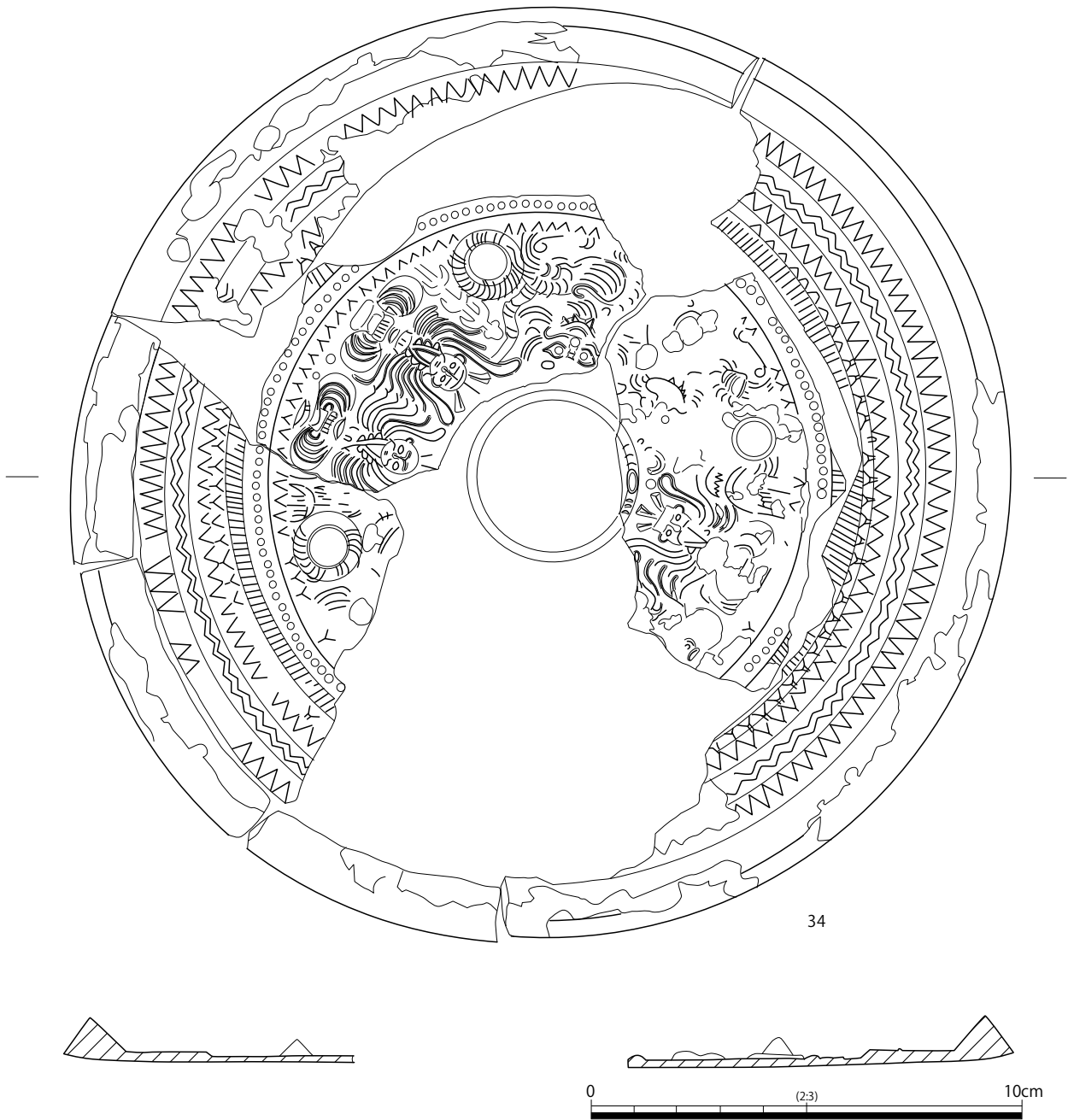


図8 2号墳の三角縁神獸鏡

- | | |
|--|---|
| <p>10. 中川 寧 1997 「いわゆる「山陰系土器」についての若干の考察」『立命館大学考古学論集』I、pp. 159-166</p> <p>11. 東森市良 1967 「山陰地方発見の壺棺とその特色」『考古学研究』第14巻第2号、pp. 9-23</p> <p>12. 樋口隆康 1952 「同型鏡の二三について—鳥取県普段寺山古墳新出鏡を中心として—」『古文化』第1巻第2号、日本古文化研究会</p> <p>13. 福永伸哉 1996 『三角縁神獸鏡の研究』大阪大学出版会</p> | <p>14. 松本岩雄 1986 「墳丘出土の大形土器」『山本清先生喜寿記念論集 山陰考古学の諸問題』、pp. 123-166 (高田 健一)</p> |
|--|---|